想像界の生物相

ヒマラヤの雪男イエティ

民博 機関研究員 古川 不可知

資料名	写真（雪男のまねをする男）
データ番号	上：X0216186、下：X0217358 ネパール写真データベース http://htq.minpaku.ac.jp/databases/nepal/
撮影	上：高山龍三、下：飯島茂（ともに 1958 年）
地域	ネパール

雪男の真似をしているこの男性の姿は、一九五八年にネパール中西部のドルパ郡ツァルカで撮影されたものだ。撮影者の高山龍三先生によると当時の印象は強く残っていないとのことだが、雪男の手足は前後反対についており、走るときは四つ足になって後ろ向きに進むとの伝承もあるため、おそらくその動きを模倣しているのだと思われる。なお日本語の「雪男」は、英語圏の探検家が一九二〇年代から使い始めた「忌まわしき雪男（Abominable Snowman）」という名称に由来する。

◆◆◆謎の生態◆◆◆

ネパール・ヒマラヤの雪男は、日本ではイエティという名前でもよく知られている。ドルパ郡からは東南方向に三五〇キロメートルほど離れたエベレスト近くのクンブ地方にも雪男の話が数多く伝わっており、その正体はクマだともサルだともいわれている。またクンブ地方に所在するクムジュン寺院には雪男の頭が、パンボチェ寺院には雪男の頭と手が安置されている。

現地のシェルパの人びとによると、雪男とはおおむね次のような存在だ。クンブ地方には人を食べるミティと動物を食べるチュティ、および悪さだけをするイエティという三種類の雪男がいる（ただしこの区別は厳密ではなく、説明する人によって特徴も入れ替わる。以下イエティと総称）。全身が茶色い毛皮に覆われており、背丈は人間より低いとも高いともいわれる。男女（雄雌）の別があって山の奥で暮らしている。人語を解さず「ヒューー」という甲高い声を上げるが、高徳の僧だけはイエティと会話できる。

山中でイエティと遭遇した話は、高齢者や亡くなった人物の経験談として定型化された語りがよく聞かれる。もっとも定番なのは、現在も存命の、ある老女が若いころに出会ったというイエティの話だ。彼女がマッチェルモの放牧場でヤク（ウシの仲間）を追っていると、突然イエティがあらわれた。イエティは彼女を川に放り込むと、ヤクの角を掴んで体を真っ二つに裂き、そのまま死骸を引きずって山へと消えていった。彼女は川のなかで震えながらその様子を見ていたという。

◆◆◆雪男の居場所◆◆◆

だが最近は、イエティに出会うこともほとんどなくなった。ある女性は言う。「むかしの人は村から離れたヤクの放牧場で何日も過ごしていたからよくイエティの声を聞いたし、出会ったりもした。だけど最近は観光客が山のあちこちまで来るようになったから、イエティはどこかに行ってしまったのだ」。

山からはいなくなる一方、イエティはネパールを代表するイメージのひとつとなった。イエティ航空をはじめ多くの会社がその名を冠し、観光地ではイエティを模した土産物が売られている。また特に若いシェルパたちは、しばしば「本で読んだ話では」と留保しながら、生き生きとイエティについて説明してくれた。おそらく観光地化が進むなかで、客の期待に応えるようにイエティの物語も常に語りなおされてきたのだろう。それでも、静かな山村の薄暗い土間で声真似を交えつつ語られるイエティの話は、わたしの背筋を寒くさせるのに充分であった。

イエティグッズ（カトマンズにて2018年に購入）